

# 世界の一隅を照らす — 中村 哲 命の水を贈った医師 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

来る日も来る日も治療に明け暮れた。それでも患者は一向に減らない。医療だけでは限界があると中村 哲（1946-2019）は思い知らされた。

人道支援の一環として医療活動に打ち込んできたアフガニスタンでは凄まじい大旱魃で農地が砂漠化し、大量の農民が難民と化していた。戦火の絶えない不毛地帯で人々は飢餓に苦しみ、汚水を飲んだ子供たちは赤痢に感染して死んでいく。

清潔な水と十分な食糧さえあれば多くの命を救うことができる。そう確信した中村は医療活動に加え、失われた大地の復興をめざそうとした。「100の診療所より1本の用水路を」を合言葉に文字どおり泥まみれになりながら悪戦苦闘する。

## NGOでペシャワールへ

中村は現在の福岡県福岡市博多区堅粕で生まれ、幼い頃に母の実家がある北九州の若松に移り住む。祖父の玉井金五郎は港湾労働者を取り仕切る玉井組の組長として若松港の荷役作業を一手に請け負い、大きな屋敷には血気盛んな男たちとその家族が慌しく出入りしていた。父は玉井組の下請けとして新たに中村組を立ち上げる。

母の兄で中村の伯父にあたる玉井勝則は作家の火野葦平として有名になる。早稲田大学中退後、日中戦争応召中に『糞尿譚』で芥川賞を受賞する。続いて上梓した『麦と兵隊』などの兵隊3部作が300万部を超えるベストセラーになった。1953年

の自伝的長編『花と竜』の主人公のモデルは玉井金五郎で高倉健などの主演で何度も映画化された。

玉井組と違って中村組は長つづきせず一家は福岡市に近い古賀市に転居する。借金とりが頻繁に來たものの、両親に悲壮感はなく旅館業を始めた。中村は古賀西小学校から西南学院中学に進み、同校在学中に洗礼を受けてクリスチャンになる。

福岡高校から九州大学医学部に入学し、3年生のときに同級生の久保千春と共に鹿児島県・大隅半島の過疎地でボランティアの診療活動を行う。のちに九州大学学長となる久保は中村を評して「自分の思ったことを実行する強さに非常に感心していた」と述懐している。

卒業後、病院勤務の傍ら好きな登山と昆虫採集に精を出す。原始の美しいモンシロチョウを見たくて山岳会のネパール遠征隊にも同行する。ところが思いがけず現地の人々から医師として頼られ、自分の居場所を見つけたような気がした。

38歳になった1984年、非政府組織（NGO）の日本キリスト教海外医療協会（JOCS）から派遣されてパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任する。日本政府から一円の援助も受けない中村の活動を支援するためにNGOペシャワール



中村 哲

会が結成された。仲間たちと共にハンセン病の治療を中心とする医療活動を幅広く展開し、7年後にアフガニスタンで初の診療所を開設する。

## 戦争をしている暇はない

アフガニスタンでは2000年夏の大旱魃で農地が干上がり、非衛生的な状況下で赤痢患者が激増する。朝から晩まで治療しても患者が絶えることはない。中村は「薬だけでは人々の健康は守れない」「アフガニスタン問題はまずパンと水の問題である」と発想を転換し、清浄な水を求めて井戸を掘る活動を開始する。2006年までに飲料用の井戸約1600本、灌漑用の井戸を16本掘ったという。

一方、2001年9月11日にアメリカ史上最悪の同時多発テロが勃発し、世界を揺るがせた。ブッシュ政権は反米イスラム原理主義組織アルカイダを率いるオサマ・ビンラディンを首謀者と断定し、アルカイダを匿っているとしてアフガニスタンへの空爆を開始する。中村は「戦争をしている暇はない」「どの場所どの時代でもいちばん大切なのは命」と主張し、砂漠化した大地に水路をつくって耕作地をうるおす灌漑事業に着手する。

専門家の眼から見れば水路の建設はきわめて無謀な試みだった。最初は流量計算や流路設計の基礎も理解できず高校の数学から学びなおした。やがて資金も道具も限られていた江戸時代の治水技術に着目する。福岡県朝倉市で江戸時代に設けられた山田堰に何度も通い、試行錯誤を繰り返しながら独自の治水技術を体得していった。近代的な工法と違って伝統的な工法は現地の人々が自力で流用できるというメリットもあった。もっとも多忙なこの時期、中村は小学生の息子を難病で亡くし、母親代わりだった姉も失っている。

医者でありながら水路の建設に精魂を傾ける中村の姿は日本でも反響を呼び、少年マガジンに中村哲物語が掲載され、著作『アフガニスタン・命の水を求めて～ある日本人医師の苦闘』が出版された。2008年に参議院外交防衛委員会に参考人として呼ばれ、アフガニスタン情勢について証言する。中村は憲法第9条に自分が守られているという立場から「アフガニスタンにいと軍事力があればわが身を守れるというのが迷信だとわかる。

敵をつくらず、平和な信頼関係を築くことが武器よりも大切でいちばんの安全保障だ。戦争で国がよくなることはない」と力説した。

## 真の英雄に灯りを掲げて

クナール川からガンベリー砂漠まで総延長約25kmを超える用水路が2010年、ついに完成した。これで約10万人の農民が平穏に暮らしていける。建設に際しては増水時のクナール川の途方もない水圧に脅かされた。取水口が決壊し、つくっては壊され、補修を繰り返した。「人々の災厄がつづく限り、私は君たちといるだろう」という使命感が中村を支えた。竣工して貯水池に水が流れ込むと農民たちの眼から涙が溢れだした。

2019年10月7日、中村は永年にわたる功績によって名誉市民権を授与される。ペシャワール会の会報に「この仕事が新たな世界に通じることを祈る」と書き記す。

同年12月4日、東部ナンガルハル州の州都であるジャラーラーバードを車で移動中に武装勢力から銃撃を受け、右胸に被弾する。現地の病院に搬送されたものの、重傷のためにパルヴァーン州バグラームにあるアメリカ空軍基地へ搬送される途中、息を引きとった。中村と共に同乗していた運転手や警備員など5名も死亡する。司法解剖の結果、肝臓損傷による失血死と発表された。

タリバンの報道官は緊急声明を発表し、組織の関与を否定する。しかしアシュラフ・ガニー大統領はテロ事件と断定した。12月7日、カブールの空港で追悼式典が行われたのち遺体は空路で日本に搬送された。追悼式典ではアシュラフ大統領がみずから棺を担いだ。

73歳で凶弾に斃れた中村は生前、たびたび沖縄を訪れて活動報告を行っていた。著書にサインを求められると照一隅＝一隅を照らすと書き添えた。「命に対する哀惜、命を愛おしむという気持ちで物事に対処すればだいたい誤らない」と語っていた中村はまさしく世界の一隅を照らしていた。

2019年12月5日、アフガニスタンで国民による追悼集会が一斉に行われた。首都カブールでは全国から集まった人々が「真の英雄」と書かれた横断幕を掲げ、ろうそくを灯して行進した。